

## 原著論文

民間スイミングクラブにおける選手育成に関する研究

—「人間力」教育に着目して—

三角さやか\*

## 抄録

民間スポーツクラブの選手育成の場において、競技成績の高さは一般に高度な技術指導や十分なトレーニングによって作り出されると考えられている。しかし筆者は、民間スポーツクラブでも学校運動部活動と同様に競技力向上だけではなく指導者の教育的配慮が求められており、その配慮が競技成績に関係すると考えた。そこで本研究では、民間スイミングクラブという環境下での選手育成が実際にどのように行われているのかを明らかにすることにした。

その方法として、まず民間スポーツクラブの選手育成に関する先行研究を調べたうえで、日本の競技スポーツを取り巻く環境の変化について、2000年以降のスポーツ政策の変化から明らかにした。加えて、そこでキーワードとなっていた「人間力」という言葉について誕生と転用の経緯を探った。

次に、大阪府下に所在する民間スイミングクラブで全国大会に選手を輩出しているクラブにおいて選手育成を行っている指導者6名を対象にアンケート調査とインタビュー調査を実施した。アンケート調査では、民間スイミングクラブにおいて選手育成クラスがどのような条件で開設されているのかを明らかにした。そのうえで、インタビュー調査では、指導者が現場で選手に行う指導の詳細を質問し、分析を行った。

その結果、民間スイミングクラブでは選手育成を行う際に、多くの選手が小学校低学年から選手育成クラスで練習を始め、中学・高校に進学しても同じ環境で一貫したトレーニングが行っていることがわかった。またその際、水泳の技術を学ぶだけではなく、「人間力」という言葉に集約されるようなスポーツを通じた教育が行われていることが明らかとなった。さらに、学校外教育機関として、選手の進学とキャリア形成の手助けをする機能を果たしていることも明確になった。

キーワード：民間スイミングクラブ、学校外教育、選手育成、人間力

---

\*関西大学大学院人間健康研究科 博士課程後期課程

## Athlete Development at Private Swimming Clubs

— Focusing on “Ningen-Ryoku (Human Qualities)” —

Sayaka Mikado

### Abstract

The high level of performance outcomes by athletes at private sports clubs is generally attributed to advanced technical instructions and sufficient training. However, it is possible that, educational concerns by the coaches on education and the competition results. Therefore, this study aims to demonstrate how athlete development is actually implemented within private swimming clubs.

First, previous studies on athlete development at private sports clubs were examined, followed by a scrutiny of the changes in sports policies since 2000, particularly regarding the evolving landscape of competitive sports in Japan. Furthermore, the study investigated the emergence and adoption of the term “human qualities” in this field.

Next, two surveys were performed on the instructors of six private swimming clubs in Osaka. A questionnaire attempted to examine the conditions under which athlete development classes in private swimming clubs. Additionally, interviews inquired about and analyzed the details of the guidance that coaches provide to the athletes on-site.

The results revealed that when athletes are trained at private swimming clubs, many of them start practicing during their early years of elementary school. They are trained consistently in the same environment even in junior and senior high schools. Furthermore, this training not only teaches swimming techniques but also imparts humanistic education through this sport, which can be termed as “human qualities.” The study also noted that out-of-school education assisted athletes in their progression to higher education and in developing their careers.

Keywords: Private swimming club, Out-of-school education, Athlete development, Human qualities

## 1. 研究の目的と方法

学校の運動部活動には「強豪校」と呼ばれるチームが存在し、チームを構成する生徒は年々入れ替わっても高い競技成績を維持し続ける。この現象は民間スポーツクラブにもあり、その1つであるスイミングクラブでも「強豪クラブ」が存在する。高い競技成績が継続することが「強豪クラブ」と呼ばれる要因になるが、競技成績の高さは一般に高度な技術指導や十分なトレーニングによって作り出されると考えられている。しかし筆者は、次に示す先行研究の結果から民間スポーツクラブでも学校運動部活動と同様に、競技力向上だけではなく指導者の教育的配慮も求められており、その配慮が競技成績に関係すると思った。そこで本研究では、「強豪」と呼ばれるスイミングクラブでの競泳の選手育成が、実際にどのように行われているのかを明らかにすることにした。その方法としては、まず教育的配慮の強調に結びついたと思われる日本の競技スポーツを取り巻く環境の変化について、2000年以降のスポーツ政策の変化から明らかにした。次に、そこでキーワードとなっていた「人間力」という言葉について誕生と転用の経緯を探った。そのうえで、「強豪」スイミングクラブについて、アンケート調査から選手育成が行われている環境やシステムを、インタビュー調査から選手育成現場の指導内容を調べた。

## 2. 先行研究

日本では学校体育からスポーツ文化が広まり、学校運動部活動を中心に選手育成が行われてきた歴史もあって、スポーツの教育的価値は主に学校運動部活動と結びつけて語られてきた。その一例として、甲斐（2000）は、大都市近郊の進学校のラグビー部を対象とした調査において、監督の指導方針として、ラグビーによって生徒たちが様々な場面で方針を決定する判断力を養い、方針を実現させるための推進力を育む機会を提供し、生徒の自主性を育もうとしていたことを指摘した。実際に行った甲斐の調査の中でも、生徒同士が活動について積極的にコミュニケーションを取る姿が見られたとしており、ラグビーというスポーツを通して生徒の教育を行っている一例が示されていた。しかし、民間スポーツクラブでのスポーツを通じた教育の実態と評価については、先行研究の蓄積があまり多くない状況である。

その数少ない例外として、立木（2014）はJユースクラブと高校サッカー部の比較検討を通して、少年期のスポーツ環境としての両者の違いについて考察することを目的とし、クラブ指導者と学校運動部活動指導者にインタビュー調査と質問紙調査を行っている。その結果、Jユースクラブ指導者へのインタビュー調査において競技能力の向上だけでなく「学校生活への積極的参与」を選手に推奨し、学業を含めた教育的配慮の重要性が意識されている点が明らか

となった。また、自分が試合に出場していない時でも他の選手を応援できる社会性を身につけさせることを意識していた。さらに、立木（2018）は中学生を対象に同様の調査を実施し、同様の結果を示している。

霜島・木村（2014）は、民間テニスクラブにおいて選手育成を行うジュニアチームを保有することがクラブマネジメントにもたらすメリットとデメリットについて明らかにするために、ジュニアチームを統括するコーチを対象にインタビュー調査を実施している。その結果、そこでは自己表現に対するメリットとデメリットをジュニアチームの選手たちに指導することで、選手がうまくコミュニケーションを取れるようになったり、学校の授業中に手を挙げられるようになったりするといった行動の変化がみられ、ジュニアチームが教育の場として機能しうる可能性が示唆された。また、Jリーグの育成世代における「スポーツによる社会化」に関する研究の一例として、沖田ら（2023）は、Jクラブが育成する中学・高校世代の選手への質問紙調査と観察調査から、選手がクラブにおける役割を遂行する中で、「主体性」「目的遂行」「立ち振る舞い」「自己解決」といった社会性や、自身の将来に対する志向性等を身につけていることを明らかにした。

このように、民間スポーツクラブにおいてもスポーツを通じた教育（スポーツによる社会化）が行われていることが明らかになっているが、これまでの研究はサッカー（Jリーグ）とテニスを対象として行われてきた。そこで本稿では、民間スイミングクラブを対象として指導者の教育内容について調査研究を実施した。

### 3. 日本のスポーツ政策とスポーツ環境の変化

日本の夏季五輪の成績は、1964年の東京五輪を頂点として、その後長期にわたり低落傾向をたどり、ソウル五輪以降のメダル数は低迷を続けていた。その間、幾度となく選手強化計画が立案されるも、競技力向上につながらなかった。しかし、当時の文部省は、2000年にスポーツ振興基本計画を発表し、2001年からの10年間の数値目標と具体的な施策を示した。この翌年の2001年に、日本オリンピック委員会（以下JOC）は国際舞台で活躍できる人材の育成を目的としたJOC GOLD PLANを策定した。同年には1998年に始まったスポーツ振興くじの収益の一部を利用し運営する国立スポーツ科学センター（JISS）が設立され、エリート選手育成の拠点が誕生した（文部科学省 2000：日本オリンピック委員会 2002）。

2012年に出された第1期スポーツ基本計画では、2012年～2016年の5年間の政策目標として、「国際競技力の向上を図るとともに、スポーツを人類の調和のとれた発達に役立てるといふオリンピズムへの深い理解に立って、競技性の高い障害者スポーツを含めたトップスポーツにおいて、ジュニア期からトップレベルに至る体系的な人材養成システムの構築や、スポーツ

環境の整備を行う」ことを掲げた（文部科学省 2012）。これらは夏季五輪の招致に向けた目標設定となっており、競技力の向上だけでなく、国際貢献や国際交流といった人の心の教育、スポーツによる教育に目を向けられた内容となっていることがわかる。

これに関連した政治の動きとしては、小泉政権（2001年～2006年）下で国民スポーツ担当大臣を務めた麻生太郎が2008年に首相となった際、「スポーツが日本社会を活性化する鍵となる」とし、「知力や精神力といった総合的な人間の力、すなわち『人間力』を鍛えることがスポーツの役割」という考えのもと、スポーツ庁の新設が検討された（スポーツBiz net 2009：日本経済新聞 2009a）。同年9月には翌年開催のバンクーバー五輪日本選手団団長に参議院議員の橋本聖子が就任し（日本経済新聞 2009b）、2013年にJOC選手強化本部長に就任した（日本経済新聞 2013）。橋本は2013年に発刊した著書「オリンピック魂」の中で、「今日のスポーツはただ体を鍛えるだけではなく心も鍛えて人間力を高め、魂を磨くことを目標にしている」と述べている。さらに2014年にJOC選手強化本部は「人間力なくして、競技力向上なし」という指針をもとに選手強化を行い、その以降この指針はJOCの選手強化スローガンとなっている（日本経済新聞 2014）。このように、政治とJOCがひとつになってスポーツによる教育を「人間力」と表し、これに重点を置いたスポーツ振興を唱えた様子が窺える。

他方、日本水泳連盟（以下、日水連）では、2014年からジュニアオリンピックカップで活躍した中学1年生～高校3年生を対象にジュニアSS（スーパースイマーズ）育成合宿を実施している。実施当初の主旨は、①リオデジャネイロ、東京五輪に向けた土台作りとしての定期的なジュニア選手の強化、②合宿のテーマを「基本を正しく大切に」とし、泳法の基本とトレーニングの基本を身につける、③研修によるコーチと選手の理論的なレベルアップの3つとし、競技力向上が主な目的となっていた（日本水泳連盟 2014）。しかし、2017年からは、①東京五輪はもとより、2024年五輪も見据えた、定期的かつ継続的なジュニア選手の強化、②トップスイマーに求められる競技力と人間力のさらなる向上、③合宿を通じた幅広い交流や様々な経験による指導者のレベルアップの3つに主旨が変わっており、競技力向上のみならず、人間力の向上にも目を向けられていることがわかる（日本水泳連盟 2017）。このように、日水連でもJOCと同様に人間力の向上を選手強化のために必要な要因に挙げるよう選手強化の方針が変化してきた。

#### 4. 「人間力」とはなにか

「3.」で述べた通り、JOCや日水連は「人間力」という言葉を用いてスポーツによる教育を強調することが増えてきたが、具体的にどのような要因が「人間力」といえるのかが明言されておらず、学校運動部活動を実施する学校の教育指針を示す学習指導要領の保健体育や特別活

動の条文中では見られない（文部科学省 2017：2018）。2022年5月時点で、CiNii Research や新聞記事データベース等で検索したところ、この「人間力」という言葉が（「機械力」に対する「人力」の意味ではなく）現在のような意味で最初に現れたのは1964年で、学術専門誌の『労務研究』（1964）においてであった。そこでは学校教育と企業教育のギャップを当時の問題としてとらえ、そのギャップを埋める企業教育の目標を「人間力」の育成とされた。そこで定義された「人間力」とは、指示されたことだけを行うのではなく、「自ら考え行動する力」であった。

新聞各紙の検索結果によると、その言葉がよく知られるようになったのは2000年代であり、まず2002年6月に行われた政府の経済財政諮問会議の経済活性化戦略の中で、最初に「人間力戦略」として大学間の競争が掲げられ、経済産業省のみならず文部科学省（以下文科省）も経済政策に加わっていく方針が示されていた（日本経済新聞 2002a）。その後2003年4月の内閣府・人間力戦略研究会は、文科省が教育改革の中で提唱してきた、自ら学び、自ら考える力などの「生きる力」の理念をより発展させ、「人間力は社会を構築し運営するとともに、自立した1人の人間として力強く生きていくための総合的な力」と定義している（内閣府 2003）。また、2005年には中央教育審議会答申の中で、義務教育の構造改革が掲げられ、新しい義務教育の姿として、「学校の教育力、すなわち『学校力』を強化し、『教師力』を強化し、それを通じて、子どもたちの『人間力』を豊かに育てることが改革の目標である」とされた（文部科学省 2005）。

このように、「人間力」という言葉は、企業人の教育から始まり、その後、スポーツ行政を監督する文科省でも注目された結果、選手育成の場でも使用される言葉となり、JOC や日水連も「人間力」という言葉を用いての教育を奨励するようになった。この「自ら学び、自ら考える力」という理念を発展させた「人間力」は、民間スイミングクラブの選手育成の場でどのように語られているのだろうか。

## 5. 「強豪」民間スイミングクラブの調査

### 5.1 調査の概要

本研究では、民間スイミングクラブという環境下での選手育成が実際にどのように行われているのかを明らかにするため、大阪府の複数のスイミングクラブで選手育成クラスの指導者を対象に、選手育成システムの概要についてアンケート調査を実施した。そのうえで、指導者たちの教育内容が実際どのようなものかについて、立木（2018）や霧島・木村（2014）の先行研究を参考に質問項目を作成し、半構造化インタビュー調査を実施した。アンケート調査及びインタビュー調査は2021年10月～12月に、筆者が直接調査対象者に趣旨説明を行い、承諾

を得た場合のみ実施した。インタビューは個別に行いボイスレコーダーで録音し、その後文字データ化し、分析を行った。

アンケートの質問項目は表1の通りで、インタビューの質問項目は表2の通りである。

表1 アンケート調査の内容

<p>【質問1】スイミングクラブで開設しているクラスについて</p> <p>(1) そちらで開設されている小学生以下のクラスについて概要を空欄にご記入ください。</p> <p>(2) 中学生や高校生が、小学生以下のクラスに参加することは可能ですか？ はい ・ いいえ</p> <p>(3) 小学生以下のクラス以外で、中学生や高校生が参加できるのはどのようなクラスですか？ クラス名： 対象者： クラス開設の目的：</p> <p>(4) 高校生以下の子どもたちが競技者育成クラスに在籍できる条件は何ですか？</p> <p>(5) 競技者育成クラスのレベル別編成について</p> <p>〈1〉競技者育成クラスにレベル別のチーム編成はありますか？ ある ( ) ない ( ) ⇒「ある」と回答された場合、以下の2問にもお答えください。 ①チームはいくつありますか？チームの数をお答えください。 ②レベル別のチーム編成はどのようなルールでされていますか？</p> <p>〈2〉競技者育成クラスの練習は基本的に週何回、各回何時間行っていますか？ (チーム編成をされていて、チームによって違いがある場合は各チームごとに記載して頂けると有難く存じます。)</p> <p>【質問2】スイミングクラブに在籍する指導者について</p> <p>(1) そちらのクラブに指導者は何人いらっしゃいますか？</p> <p>(2) そのうち専任(社員)の指導者は何人ですか？</p> <p>(3) 競技者育成クラスの指導は何人で行っていますか？</p> <p>(4) (3)のうち専任(社員)の指導者は何人ですか？</p> <p>(5) (3)のうち競泳競技を自分でも行っていた指導者は何人ですか？</p> <p>(6) (3)のうち大学や専門学校で運動を専門に勉強された指導者は何人ですか？</p> <p>(7) 指導者の中で日本水泳連盟の公認コーチ資格保有者は何人ですか？</p> <p>(8) (7)のうち競技者育成クラスの指導者は何人ですか？</p>
--

表2 インタビュー調査の内容

<p>1) 指導者のプロフィール</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・自身の運動歴と競技歴について</li><li>・競技者育成クラスの指導者になった動機と経緯を、差支えない範囲で教えてください。</li><li>・指導者になるためにどのようなことを学んでこられましたか？</li><li>・目標とする指導者あるいはあこがれている指導者はいらっしゃいますか？</li></ul> <p>2) 指導について</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・指導の目標や方針はありますか？それはどのようなものですか？</li><li>・レベル別のチーム編成を行っている場合、何か気をつけていることはありますか？</li><li>・指導者として、得意とされていることは何ですか？</li><li>・指導の中で課題となっていることはありますか？それは何ですか？</li><li>・強い選手を育てるうえで、こだわりはありますか？それは何ですか？</li><li>・理想的な指導スタイル(チーム作り)はありますか？それはどのようなものですか？</li></ul> <p>3) 指導者としての信念について</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・指導の中で(競技レベルの向上以外に)心掛けていることは何ですか？</li><li>・どのようなときにやりがいを感じますか？</li><li>・選手に(競技レベル向上以外に)競技を通して身につけて欲しいことはありますか？</li><li>・あなた自身は指導を通じてどのような人になりたいですか？</li></ul> <p>4) 選手の進路について</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・選手が高校や大学に進学する際の進路について、クラブや指導者の方針はありますか？</li><li>・選手が「スポーツ推薦」を利用して進学する場合のサポート等はされますか？</li><li>・サポートをされる場合、具体的にはどのようなことをされますか？</li><li>・選手の練習環境について、学校部活動を優先するか、スイミングクラブでの活動を優先するか、決まりはありますか？</li></ul> <p>5) その他</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・競技者育成クラスの選手の活躍はクラブの宣伝効果になりますか？</li><li>・一般クラスのスクール生が、最初から将来的に選手になることを目的として入会されるケースはありますか？</li><li>また、そのような場合、目的に応える指導を行っていますか？</li></ul>
--

調査の際には、協力を断っても不利益がないことを対象者に十分説明し、調査で得られた情報から個人が特定されないように配慮した。尚、本調査は、関西大学人間健康学部・人間健康研究科研究倫理委員会の承認（審査番号 2021-10）を得て実施している。

## 5.2 調査対象者と所属スイミングクラブ

調査を行ったクラブは、大阪府下で開設6年以上のクラブを対象とした。大阪府下で子ども向けのスイミングスクールが行われている施設は130件であり、このうち選手育成クラスを開設しているクラブは86件であった（スイミング情報ネット 2022）。この86件のうち民間スイミングクラブに所属する選手が出場できる全国大会に選手を輩出しているクラブは49件である（日本水泳連盟 2021）。その中で、全国大会に選手を輩出しているか（いたか）という条件に当てはまり、なお且つ調査協力への同意が得られた6クラブで調査を行った。表3に示す通り、これらの6クラブについてはAクラブから順に競技成績の高い順に並べており、競技成績は参加標準記録が速い大会から順に、2021年度の日本選手権、ジャパンオープン、JOCジュニアオリンピックカップ夏季水泳競技会（以下、J0杯）の3つの大会において、出場した選手の人数から判断した。なお、これらの大会は国際大会の代表選考会であることや、ジュ

表3 調査実施スイミングクラブおよび指導者

Aクラブ	特徴	1995年開設。地域密着型スイミングクラブとして運営。フィットネスクラブも併設している。
	指導者	aコーチ：50代。競泳出身。大学3年で引退。体育大出身。指導歴32年。スキーのインストラクターから転職して現職に。
Bクラブ	特徴	1975年に関西の企業が運営するスイミングクラブの1号店としてオープン。1990年頃にフィットネスクラブを増設した施設。
	指導者	bコーチ：30代。ボクシング出身。指導歴19年。小学生の頃にスイミングクラブに通っていた。体育系専門学校卒。
Cクラブ	特徴	1985年開設。全国展開しているスイミングクラブ。
	指導者	cコーチ：50代。陸上出身。指導歴38年。高卒でスイミングクラブに就職。
Dクラブ	特徴	1982年に学校法人がスイミングクラブを開設。スイミングクラブのみを運営する施設。
	指導者	dコーチ：50代。競泳出身。指導歴38年。高卒でスイミングクラブに就職。
Eクラブ	特徴	1970年にDとは別の学校法人が開設。大阪で最初のフィットネスクラブを設置。スイミングクラブとカルチャースクールを併設した施設。
	指導者	eコーチ：30代。競泳出身。指導歴16年。大学まで選手として活躍。水泳コーチのアルバイトから社員となった。
Fクラブ	特徴	2013年にフィットネスクラブとして開設。関西圏で展開している系列クラブの最初の運営形態はスイミングクラブであり、ゴルフクラブやテニスクラスも運営している。
	指導者	fコーチ：40代。競泳出身。指導歴20年。大学まで選手として活躍。水泳コーチのアルバイトから社員となった。



ニア選手にとって最も大きな大会であることから「強豪」スイミングクラブの選手が出場する全国大会という判断基準にした。

Aクラブは過去にオリンピックを輩出しており、メダルも獲得している。CクラブとFクラブでは系列のクラブでオリンピックを輩出している。これらの3クラブでは、水泳（競泳）競技にとって最高の舞台である五輪に狙いを合わせた選手育成方法や、選手の発掘から育成までのノウハウがあると予測できる。また、Aクラブ、Bクラブ、CクラブとDクラブでは、過去にジュニアの国際大会に選手を輩出しており、中でもAクラブとBクラブは現在もジュニアの国際大会に選手を輩出している。このことから、ジュニア選手の育成システムが存在し、指導者の能力が高く、チーム環境もある程度整っていると考えられた。

各クラブの運営形態については表3に示した通りで、スイミングクラブのみの運営形態であるのがCクラブとDクラブである。AクラブとBクラブはスイミングクラブにフィットネスクラブが併設されている運営形態、Eクラブはスイミングクラブにカルチャースクールが併設されている運営形態である。Fクラブはフィットネスクラブ内に設置された子ども向けのスイミングクラブで、フィットネスクラブ運営に支障をきたさない範囲での子ども向けスクールを展開している。このように異なる運営形態のクラブを選出したことから、運営形態によるクラブ環境の差が見られると予測された。

指導者は50代が3名、40代が1名、30代が2名であり、指導者自身の子どもの頃のスイミングクラブとのかかわりや、年齢による指導者の価値観の違いが窺えると予測した。また、過去に経験してきたスポーツでは、水泳が5名、このうち50代の2名は学校運動部活動で選手として水泳を経験している。他の40代1名と30代の1名の計2名はスイミングクラブと学校運動部活動の両方で選手として活動し大学まで続けていた。30代のもう1名は子ども時代の習い事として水泳を経験し、選手としてはボクシングを経験している。水泳経験のない50代の1名は陸上の選手を経験している。指導者自身が経験してきたスポーツ種目によって指導に違いが見られると予想された。

アンケート調査では、民間スイミングクラブで、選手を育成するシステムを明らかにするために、どのような子ども向けのクラスが設置されているのか、いわゆる習い事の一般クラスから選手育成クラスに移動する条件とはどのようなものか、選手育成クラス的环境はどのようなものかを調べた。一般的な習い事である子ども向けのクラス設定には大きな違いはないが、一般クラスから選手育成クラスへ移動する条件や練習環境には各クラブで独自のシステムが存在すると考えられた。

インタビュー調査では、まず各クラブの選手育成クラスの指導の詳細について、各々の指導現場に違いがあると予測し、指導者の発言からその違いを分析した。次に、指導現場においてスポーツを通じた教育がなされていると予測し、各クラブの指導者がトレーニング以外の部分

の指導で心掛けていることについて問いかけた。最後に、所属する選手にスイミングクラブ側から進路指導をしているかについて指導者に質問した。

## 6. 調査結果と考察

### 6.1 アンケート調査の結果と考察

#### 6.1.1 小学生以下の子どもが通えるクラスについて

一般に、民間スイミングクラブにおいて子どもが通えるクラスには、「ベビークラス」、「未就園児クラス」、「一般クラス」、「選手育成クラス」が存在する。「ベビークラス」は親子でスキップをとりながらプールに入るクラスである。「未就園児クラス」は一般クラスよりも早い時間に開かれ、子どもの昼寝の時間に重ならない工夫がされており、泳法を習得するより母子分離や水慣れを目的としたクラスである。いわゆる習い事のスイミングである「一般クラス」は、顔つけから4泳法習得までの過程に各クラブで独自の進級基準を設けていた。そして、「選手育成クラス」は対外試合に出場することを目的としたクラスで、競技としての水泳を練習するクラスである。民間スイミングクラブでは競技会に出場することを目的とするクラスが設定されており、水泳を習い事として通うことが必ずしも選手として競技会に出場する事につながらない。

対象となった6クラブについては、「ベビークラス」はDクラブ以外の5クラブで開設されており、「未就園児クラス」はAクラブ、Bクラブ、Eクラブで開設されていた。「一般クラス」と「選手育成クラス」は全クラブが開設し、「一般クラス」の進級基準の中に「選手育成クラス」に入る基準となるタイムを設けているクラブも存在したものの、「一般クラス」の進級基準をすべてクリアしたからといって「選手育成クラス」に移動できるとは限らないという点については全クラブ共通していた。これについての詳細は「6.1.2」で後述する。

#### 6.1.2 高校生以下の子どもたちが選手育成クラスに在籍する条件

「一般クラス」から「選手育成クラス」に移動する条件として、小学校低学年を中心に「一般クラス」の生徒の中から指導者の推薦がある者としているのがBクラブとCクラブであり、クラブ内の記録会で「選手育成クラス」に入る基準タイムをクリアした者の中から「選手育成クラス」を希望する者としているのがEクラブであった。「一般クラス」の進級基準にタイムトライアルが含まれており、進級の際、「選手育成クラス」に入る基準タイムをクリアした場合に、「一般クラス」に留まる者もいれば、指導者の推薦で「選手育成クラス」に移行する者もいるのがDクラブとFクラブであった。Aクラブだけが「選手育成クラス」希望者のやる気と週3回以上練習に参加できることを条件としていた。Aクラブでは「選手育成クラス」希望

者に一度「選手育成クラス」を体験してもらい、「選手育成クラス」に移動するかどうかを希望者に決めてもらうとしていたが、チームのレベルが高いことから練習について行くことが容易でなく、希望者が自ら辞退することもあるとのことであった。

「選手育成クラス」は先述した通り、大会に出場することを目的とし、各大会の参加標準記録を突破しなければ出場できない。指導者は「一般クラス」に通う子どもの日頃の練習での泳ぎ方や練習の達成度、進級テスト時のタイムを基準として、指導者の目線から大会出場が可能なレベルまで上達する見込みがある子どもを推薦していることが考えられる。

### 6.1.3 選手育成クラス内のチーム編成と練習形態

全てのクラブが「選手育成クラス」内でレベル別のチーム編成を行っていた。どのクラブもチームのレベルが上がっていくと、練習回数と練習時間が増えていく傾向にあった。「選手育成クラス」に入ったばかりのチームでは週3回1時間から練習をはじめ、トップチームになると週6回以上2時間以上練習しているクラブが5クラブ見られた。中でもBクラブでは朝と夕方の日2回練習を含む週8回、Aクラブでは週9～12回練習しており、競技成績の高いクラブほど練習回数が多いことが明らかとなった。Eクラブだけが2チームと少ないチーム分けて構成されているためか、レベル毎の練習回数・時間に違いはなかった。

「選手育成クラス」の練習時間を確保するには、他のクラスとの兼ね合いがある。Cクラブ、Dクラブはスイミングクラブのみの運営形態で、「選手育成クラス」の時間は全レーンを「選手育成クラス」が利用でき、「選手育成クラス」がその日の最後のクラスという曜日も存在した。Aクラブ、Bクラブ、Eクラブ、Fクラブはスイミング以外にカルチャースクールやフィットネスクラブを運営しており、「選手育成クラス」と同じ時間に大人向けの遊泳レーンを設定したり、「選手育成クラス」の後に、大人向けの指導クラスが行われたりと、限られた環境下で選手育成が行われていることが読み取れた。よって、スイミングのみのクラブと、カルチャースクールやフィットネスクラブを併設しているクラブとでは、「選手育成クラス」に使用できる時間やレーン数に違いが見られた。

### 6.1.4 指導者について

各クラブの指導者の数は2名～8名と様々であったが、どのクラブも社員が「選手育成クラス」を複数人で担当していた。DクラブとFクラブではアルバイトスタッフも「選手育成クラス」の指導に携わっていた。複数人で「選手育成クラス」を担当することは、社員の公休日に代わりの指導者が指導を行う工夫と思われる。また、「選手育成クラス」の指導者は必ずしも水泳経験者であるわけではないことも明らかとなった。「選手育成クラス」の指導者の中には、日水連が発行する公認コーチの資格保有者も存在し、AクラブとCクラブ、Dクラブがそれに

あたる。中でもAクラブとCクラブでは会社の方針で、「選手育成クラス」の指導者は必ず資格を取得するようになっていた。それは、担当している選手が代表合宿や海外遠征に選ばれた際に引率コーチとして帯同する場合に必要であるためであり、会社の方針として選手強化を行っていることがわかる。

### 6.1.5 アンケート調査のまとめ

アンケート調査では、民間スイミングクラブにおいて、ジュニア選手を育成するシステムを明らかにするために、どのような子ども向けのクラスが設置されているのか、いわゆる習い事の「一般クラス」から「選手育成クラス」に移動する条件とはどのようなものか、「選手育成クラス」の環境はどのようなものかをアンケートの回答から分析した。

一般クラスから「選手育成クラス」に移動する条件が各クラブで設定され、「選手育成クラス」希望者自身の意志と、指導者の目線から対外試合に出場できるレベルまで伸びる見込みと意欲が認められる会員が「選手育成クラス」に移動できることが明らかとなった。また、AクラブやBクラブ、Cクラブといった競技成績の高いクラブでは基本的に小学校低学年で会員が「一般クラス」から「選手育成クラス」に移動し、中学・高校まで同じ環境でトレーニングができています。また、どのクラブも「選手育成クラス」に移動する時期が小学校低学年に集中していることから、結果的に「選手育成クラス」内のチーム編成やチーム分けシステムが類似している。つまり、選手育成を小学校低学年から段階的に指導を行うチーム造りが競技成績に関係してくると読み取れた。

「選手育成クラス」を取り巻く環境はクラブの運営形態によって様々で、指導者や練習時間および練習に利用できるレーン数が異なることが明らかとなった。会社として選手育成に力を入れているAクラブやCクラブでは指導者に日水連の公認コーチ資格を取得させていた。さらに競技成績の高いAクラブやBクラブでは平日の夕方の練習以外に土日の朝練習など営業時間外を利用して練習時間を確保しており、高い競技成績を修めるには限られた条件の中でも練習環境を整える工夫が必要であることが示唆された。

## 6.2 インタビュー調査の結果と考察

### 6.2.1 指導について

「指導の目標や方針はありますか？それはどのようなものですか？」という質問に対して、大会名や順位等の具体例を挙げたのはcのみであった。

これに対し、bとdは競技力の向上と人間性の向上は切り離せないとし、スポーツによる教育が行われていることが見受けられた。bは、「競技力の向上を前提に、全国大会で闘うためには競技者というよりも人として礼儀や挨拶という部分をきちんと教える」とし、全国大会に

出場すると他のチームから良くも悪くも見られるようになるという自覚が必要であるという指導者の考えが読み取れた。dは、「競技というものは保護者の協力のもとに『させてもらっている』もので感謝することや、競技レベルが上がったら謙虚さと誠実さを持ち、人間レベルも上げる。競技力が同じ選手が2名いる場合に、横柄な態度の選手よりも謙虚さや誠実さがある選手の方が隙がなく、競技力も人間力もあるとなると太刀打ちできない」と回答し、人としての成長がレース戦略の一部になるという考えが見受けられた。eは、「水泳をできるだけ長く続けてもらうために、水泳を好きになってもらう」ということを方針とし、選手育成クラスの厳しい練習の中でも楽しむことを身につけて欲しいという指導者の気持ちが感じられた。

同じ質問に対して、「選手のサポートがコーチの仕事」と回答したのがaとfであった。Aクラブでは、練習メニューを作るのは選手自身で、そのメニューが選手の目標を達成する妨げになっていないか等のチェックをすることと、練習を頑張らない選手の頑張らない理由を取り除くことが指導者の仕事と考えられていた。このように、選手自身が目標達成のために練習を考えるという行為は、目標達成に至るまでの過程を先読みし、自ら考え行動する力を教えている様子が窺え、「人間力」という言葉に関連付けられる能力の一端を育てているように思われた。fは、スイミングクラブは部活動ではないというスタンスで、チームで1つの目標に向かうというようなことはせず、保護者が会費を払って通わせてくれている子どもたちの人生を、水泳を通じてサポートをすることが方針であり、選手個人の目標に寄り添っていることが読み取れた。

「指導者として、得意とされていることは何ですか？」という問いに対して、技術的な部分を回答したのは50代の指導者3名のうちの1名であるcのみであった。

回答のあった5名のうちの残りの4名の指導者は選手と指導者の間のコミュニケーションにまつわる回答をしており、50代の指導者のもう1名のaは「(チームの選手) 全員の顔を見て、元気ない選手には声を掛ける。関西のチームとして常に笑いがあるチームになるように」と述べており、チームの雰囲気作りを大切にしている様子が窺えた。50代の指導者の残りの1名のdは「スポーツはメンタルが大事で、選手の様子を見て、競技に対してのモチベーションを上げてあげられるような声掛けをするようにしている」と述べ、選手との距離を縮める工夫をされている様子が窺えた。40代の指導者のfは「子どもがコーチに話し掛けやすくなるように、子どもの目線に立って話をする」と述べていた。自身の子どもの頃のスイミングクラブの指導者が理不尽で一方的であったことから、それとは反対のイメージの指導者であることを心掛けていたとのことだった。30代の指導者2名のうちの1名のbは「挨拶」という回答で、自身の社会経験から、気持ちの良い挨拶が生み出す良い印象を選手にも持って欲しいという指導者の気持ちが窺えた。

このように指導者の得意とする部分については、6名中4名がコミュニケーション能力を挙

げており、指導者自身が選手とコミュニケーションをとることから、選手発信で指導者とコミュニケーションをとること、またチームメイトや担当指導者以外の指導者ともコミュニケーションをとることに繋がっていく様子が窺え、「人間力」と関連付けられる他者との関係性を創り出す力のある選手を育成していることが見受けられた。

### 6.2.2 指導者としての信念について

「指導の中で競技レベルの向上以外に心掛けていることは何ですか？」という問いに対して、aは「中学生から大学生という時期は青春なのですが、昔は修学旅行とかの行事も休ませて練習させていました。今は自分の誕生日は休み。親の誕生日や家族旅行も行きたかったら行ってもよい」と述べ、水泳以外の経験をさせることも指導者の仕事のひとつであるという意見が窺えた。bは「速い選手ではなく、遅かったとしても周りから応援されるような選手が強い選手になると思います」と回答し、競技力以外に周りの人から応援されるような人間を育てるといふ教育を行っていることが窺えた。cは「選手には思いやりをもって欲しいので、人間を作るという部分で細かいことだけど、小さい子に教えてあげるだとか、人として当たり前のことをやる」と述べており、思いやりを身につけるといふ教育を行っていることが窺えた。また、dも「人間力に尽きる。今ある状況が幸せなことで、それに感謝すること。それと、マイナスなことがあっても自分に与えられた試練だと思って乗り越えるように指導しています」と述べ、周囲の人に感謝することや、自分の試練を乗り越えるといふ教育を行っていることが見受けられた。fは「練習の取り組み方や、しんどい時に頑張れるか頑張れないという部分は、大人になっても関わってくるところで、自己鍛錬だと思うので、その辺りを意識して指導しています」と述べ、選手が先を読んで行動することや、厳しい練習に耐えられる力を身につける教育を行っていることが見受けられた。

以上のように、6クラブの中、Eクラブ以外の5クラブで競技力以外にスポーツを通して社会性を身につける教育が行われていることが明らかとなった。

「どのようなときにやりがいを感じますか？」という問いに対しては、50代の指導者であるaとdが選手との信頼関係があると感じられることを挙げていた。もう1名の50代の指導者のcは選手の技術の成長について述べていた。

同じ質問に対して、40代の指導者のfは「競技力が上がることと人間力が上がることの両方ができた時です。タイムが上がることも大事だし、コーチが何も言わなくても1人でレースの準備をして片付けて帰る。あとは他人のことを考えられるようになる。これができるようになった時です」とし、水泳技術と人としての教育を指導してきた部分が選手に身につけると感じられた時であると述べた。30代のbは「選手の人生を預かっているので、ベストタイムが出ないと選手が何のために練習しているのかがわからなくて苦しくなる。ベストタイムが

出た時はほっとします」と回答し、競技力向上に責任を感じつつ指導している様子が窺えた。もう1名の30代の指導者のeは「選手がコーチとして入ってきてくれた時に、水泳が好きでいてくれたんだと感じます」と述べており、水泳を好きになって欲しいという指導者の指導方針が選手に伝わっていたことを実感した例を挙げていた。

### 6.2.3 選手の進学について

「選手が高校や大学に進学する際の進路について、クラブや指導者の方針はありますか？」について、「選手の意志を尊重」「選手の自由」と回答したのが、b、d、e、fであった。他方、aとcはスイミングクラブ側から選手に進路について条件を提示すると回答していた。その条件とは、基本的には選手が競技者として成功するのによい方向を勧めるというものであったが、その基本を押さえたうえでスイミングクラブの名声を高めるのに協力を求めるものであった。

次の「選手が『スポーツ推薦』を利用して進学する場合のサポート等はされますか？」という問いについては、すべてのクラブで「サポートします」という回答が得られた。選手側から希望があれば、指導者がその高校や大学の教員や監督に連絡を取り、選手と学校をつなぐ役割をしているとのことであった。学校側から選手に声がかかる場合は、まず指導者に学校側から挨拶があり、指導者は選手にそれを伝え、教員や監督と選手（またはその親）をつなぎ、話し合いの場を設ける役割をしているとのことであった。大学への進学に関しては、J0杯や日本選手権等の全国大会の場で、スイミングクラブの指導者と大学の教員や監督との間でやり取りが行われるとのことだった。

### 6.2.4 まとめ

インタビュー調査では、まず各クラブの選手育成クラスの指導の詳細について、各クラブの指導者の属性に応じて違いがあると予測し、指導者の発言からそれを読みとろうとした。次に、指導現場においてスポーツを通じた教育がなされていると予測し、各クラブの指導者がトレーニング以外の部分の指導で心掛けていることについて問いかけた。最後に所属する選手に対するスイミングクラブ側からの進路指導について質問を行った。

まず、指導者が経験してきたスポーツ種目による違いが見られる質問項目は見受けられなかった。他方で「指導の目標や方針」に関する質問にはスポーツを通じた教育を行っている旨の回答は6クラブ中5クラブで見られた。特にAクラブでは選手自らが考え行動する力を教え、「人間力」という言葉に関連した能力のひとつを育てていることが示唆された。また、「指導の中で得意としていること」という質問項目でもスポーツによる教育が行われている回答が見られ、6名中4名がコミュニケーションについて述べていた。50代の指導者の2名のaとdは選手とのコミュニケーションを得意としており、選手との関係づくりを日々の指導の中で

行っている様子が窺えた。40代の指導者のfは「コーチに話し掛けやすい態度で接すること」と回答し、自身の子どもの頃のスイミングクラブでの経験が活かされた指導が行われていた。30代の指導者の1名のbは「挨拶」とし、人との接し方について指導していることが考えられた。以上のことから、指導者が選手とコミュニケーションをとることを起点に、選手発信で指導者や選手と、あるいは担当指導者以外の指導者とコミュニケーションをとれるようになり、自ら行動し、他者との関係性を創り出せるといった「人間力」に関連した力のある選手を育てている様子が見られた。このことは先行研究で述べた霜島・木村（2014）と共通している部分である。

また、この質問項目からは指導者の世代差もみられ、指導歴の浅い30代は指導者側の視点から、40代の指導者は指導者と選手の視点の両方を持ち合わせ、さらに50代の指導者は選手の視点に指導者が立ち、選手との距離を近づける指導がなされ、指導経験の違いが、指導者の得意とする部分と結びついていることが示唆された。

次に、指導者がトレーニング以外の部分の指導で心掛けていることについては、6名の指導者中、5名から「人として」という内容の回答があった。aは厳しい競技生活の合間に人生を豊かにするできごとは体験させるようにしていることを述べていた。他の指導者b、c、d、fは、競技力以外に指導者である自分や他人に対する接し方について指導を行っており、心豊かな人間になるという「人間力」に関連した教育を行っている様子が見られた。また、この5名のうち4名から「人間力」という言葉が確認され、民間スイミングクラブの選手育成の場で「人間力」という言葉がスポーツを通じた教育の際に使用されていることが明らかになった。

選手の進路については、6クラブ中4クラブで選手的意思を尊重するという回答があった。他の2クラブは会社として選手育成に力を入れているAクラブとCクラブであり、クラブの名声を高めるのに協力を求める場合があることが明らかとなった。また、選手がスポーツ推薦を利用した進学を希望する場合、全クラブが選手をサポートすると回答しており、選手のキャリア形成の手助けをすることも明らかとなった。

## 7. 結論

本研究は、民間スイミングクラブの選手育成の場において、スポーツを通じた教育とスポーツによる社会化がどのように行われているのかを明らかにすることを目的とし、大阪府下で競技水準の高い民間スイミングクラブの選手育成クラスの指導者に対してアンケート調査及びインタビュー調査を実施した。

先行研究で述べた立木（2014；2018）や沖田ら（2023）のJリーグ傘下の育成世代における教育では、サッカーという団体種目の中で、自分自身を知ったうえで、目標達成のために



チーム内での役割を理解し行動することが挙げられていた。また、他者とのコミュニケーションを円滑にすることで個々の能力を高め合えることも挙げられていたが、これは霜島ら（2014）が指摘したテニスクラブでの教育とも共通していた。さらに、学業を疎かにさせず、サッカーを利用した自己の将来像を明確にさせることも挙げられていた。

これらを民間スイミングクラブの教育と比較すると、チーム内の自分自身の役割を理解し行動するという部分はチームスポーツではない民間スイミングクラブには見られないが、他者とのコミュニケーションを取ることで自己を高め合えるという部分は共通していた。また、競技を利用した進路選択に関して選手が自分自身の考えを持てるよう教育する部分も共通していることが明らかとなった。

続いて内閣府が示した「人間力」と民間スイミングクラブの指導者から聞き取れた教育内容を比較した。内閣府が推奨した「人間力」の基となったのは、文部省（1996）が「21世紀を展望した我が国の教育の在り方」で示した「自ら学び、自ら考える」であり、それをふまえたうえで「社会を構築し運営するとともに、自立した1人の人間として、力強く生きていくための総合的な力」を「人間力」と定義していた。他方、民間スイミングクラブの指導内容のうち、挨拶や感謝をすること、他人のことを考えて行動する、先読みして動く、自己鍛錬、自分のことは自分で出来るようにするという部分は、内閣府の示す「社会を構築し運営」し、「力強く生きていく」という目標と共通していると読み取れた。ただし、周囲の人から応援されるような人になるという部分は、内閣府の「人間力」と異なる部分であると読み取れた。

以上のことから、大阪府下でハイレベルな選手の育成を行う民間スイミングクラブの指導者は、少なくとも自己認識としては、水泳の技術を教えるだけではなく、スポーツを通じた社会化の教育を行っていることが示された。また、その教育のキーワードとなる「人間力」の内容は、他者との関係性の築き方や自己をリードするといった部分が内閣府の推奨する人間力戦略研究会の教育目標と共通していることがわかった。

## 文献

橋本聖子（2013）オリンピック魂—人間力を高める—。共同通信社。

甲斐健人（2000）高校部活の文化社会学的研究—「身体資本と社会移動」研究序説—。南窓社，93-100。

文部科学省（1996）文部省 審議会答申等 21世紀を展望した我が国の教育の在り方について（第一次答申）。

[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chuuou/toushin/960701.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/960701.htm)（参照日 2023年9月25日）

文部科学省（2000）スポーツ振興基本計画。

[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/sports/plan/06031014.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/plan/06031014.htm) (参照日 2023 年 5 月 15 日)  
文部科学省 (2005) 義務教育の構造改革.  
[https://warp.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/11093886/www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05102602.pdf](https://warp.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/11093886/www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05102602.pdf) (参照日 2023 年 9 月 7 日)  
文部科学省 (2012) 第 1 期スポーツ基本計画.  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/sports/plan/index.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/plan/index.htm) (参照日 2023 年 5 月 15 日)  
文部科学省 (2017) 中学校学習指導要領 (平成 29 年告示).  
[https://www.mext.go.jp/content/20230120-mxt\\_kyoiku02-100002604\\_02.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20230120-mxt_kyoiku02-100002604_02.pdf) (2023 年 5 月 31 日閲覧)  
文部科学省 (2018) 高等学校学習指導要領 (平成 30 年告示).  
[https://www.mext.go.jp/content/20230120-mxt\\_kyoiku02-100002604\\_03.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20230120-mxt_kyoiku02-100002604_03.pdf) (2023 年 5 月 31 日閲覧)  
内閣府 (2003) 人間力戦略研究会報告書.  
<https://www5.cao.go.jp/keizai/2004/ningenryoku/0410houkoku.pdf> (参照日 2022 年 4 月 7 日)  
日本経済新聞朝刊. 2002 年 6 月 3 日. 1 頁  
日本経済新聞朝刊. 2003 年 9 月 22 日. 2 頁  
日本経済新聞朝刊. 2009a 年 4 月 18 日. 3 頁  
日本経済新聞朝刊. 2009b 年 9 月 16 日. 37 頁  
日本経済新聞朝刊. 2013 年 6 月 28 日. 39 頁  
日本経済新聞朝刊. 2014 年 1 月 21 日. 37 頁  
日本オリンピック委員会 (2002) JOC GOLD PLAN 国際競技力向上戦略.  
<https://www.joc.or.jp/goldplan/gold/goldplan.pdf> (2023 年 5 月 31 日閲覧)  
日本オリンピック委員会 (2016) JOC の活動 2014-2015.  
[https://www.joc.or.jp/about/activity/pdf/2014\\_2015.pdf](https://www.joc.or.jp/about/activity/pdf/2014_2015.pdf) (参照日 2023 年 5 月 23 日)  
日本水泳連盟 (2007) 2008 年度事業計画 (案).  
[https://swim.or.jp/assets/files/pdf/pages/about/project/h20\\_finance.pdf](https://swim.or.jp/assets/files/pdf/pages/about/project/h20_finance.pdf) (参照日 2023 年 5 月 23 日)  
日本水泳連盟 (2009) 2010 年度事業計画 (案).  
[https://swim.or.jp/assets/files/pdf/pages/about/project/h22\\_finance.pdf](https://swim.or.jp/assets/files/pdf/pages/about/project/h22_finance.pdf) (参照日 2023 年 5 月 23 日)  
日本水泳連盟 (2014) 2014 年度 ジュニア SS 育成合宿要項.  
<https://swim.or.jp/fw/wp-content/uploads/2021/02/1408521504-juniorsstraining>

- camp2014.pdf (参照日 2023 年 5 月 22 日)
- 日本水泳連盟 (2017) 2017 年度 ジュニア SS 育成合宿要項.  
[https://swim.or.jp/fwp/wp-content/uploads/2021/02/1502186007-17\\_ジュニア\\_SS\\_要項\\_HP用.pdf](https://swim.or.jp/fwp/wp-content/uploads/2021/02/1502186007-17_ジュニア_SS_要項_HP用.pdf) (参照日 2023 年 5 月 22 日)
- 日本水泳連盟 (2021) ジャパンオープン 2021 登録団体別一覧表.  
[https://swim.or.jp/fwp/wp-content/uploads/2021/03/JapanOpen2021登録団体一覧表\\_0519.pdf](https://swim.or.jp/fwp/wp-content/uploads/2021/03/JapanOpen2021登録団体一覧表_0519.pdf) (参照日 2022 年 2 月 24 日)
- 日本水泳連盟 (2021) 第 97 回日本選手権水泳競技大会登録団体別一覧表.  
[https://swim.or.jp/fwp/wp-content/uploads/2021/02/1616076340-日本選手権\\_2021\\_登録団体一覧表\\_0318-1.pdf](https://swim.or.jp/fwp/wp-content/uploads/2021/02/1616076340-日本選手権_2021_登録団体一覧表_0318-1.pdf) (参照日 2022 年 2 月 24 日)
- 日本水泳連盟 (2021) 第 44 回全国 JOC ジュニアオリンピックカップ夏季水泳競技会エントリー一覧.  
[https://swim.or.jp/swim/jo-entry44/ck\\_kojin.pdf](https://swim.or.jp/swim/jo-entry44/ck_kojin.pdf) (参照日 2022 年 2 月 24 日)
- 沖田諒・神野賢治 (2023) J リーグクラブのアカデミーにおける人間形成に関する研究—カターレ富山に所属する選手のスポーツ的社会化—. 富山大学教育学部紀要, 1(2) : 71-83.
- 『労務研究』編集部 (1964) 人間力開発をめぐる各社の動き—最近の事例からみた—特集・企業における人間力開発計画. 労務研究, 17(1) : 29-35.
- 霜島広樹・木村和彦 (2014) 民間テニスクラブにおけるジュニア選手育成クラス「ジュニアチーム」の保有意義—クラブマネジメント上のメリットとデメリットに焦点をあてて—. スポーツ産業学研究, 24(1) : 85-103.
- スポーツビズ net (2009) キーマンインタビュー 2009 年 5 月 22 日.  
<https://www.spobiz.net/info/page02-1.php> (参照日 2023 年 5 月 26 日)
- スイミング情報ネット (online) 大阪府のスイミングスクール.  
<https://swimming-info.net/prefectures/osaka> (参照日 2022 年 2 月 28 日)
- スポーツ庁 HP スポーツ振興投票の収益による助成の基本方針.  
[https://www.mext.go.jp/sports/b\\_menu/sports/mcatetop01/list/detail/1381083.htm](https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop01/list/detail/1381083.htm) (参照日 2023 年 5 月 31 日)
- 立木宏樹 (2014) 少年期スポーツにおけるクラブと学校運動部の関係性に関する社会学的研究—J ユースクラブと高校サッカー部の意識形成の比較より—. 九州保健福祉大学研究紀要, 15 : 13-22.
- 立木宏樹 (2018) 学校運動部とクラブチームにおける「競技力の育成」と「人間教育」をめぐる今日的諸相：中学年代のサッカー指導者から得られた会話データの質的検討をもとに. 九州体育・スポーツ学研究, 32(2) : 9-19.